

正宗白鳥

徳田秋声論

徳田秋声論

一

徳田秋声氏の小説には、去年の夏軽井沢の高原で、『元の枝へ』を読んで、老いて愛慾に悩んでいる作者の痛ましい心境と、その枯淡な筆致に情趣を湛えている当代に類の無い技巧とに感歎して以来、月々誌上に現れる氏の短篇には殆んど目を触れなかったが、それらの短篇にはどういふことが取り扱われているかということについて

は、新聞の文芸欄の評語や知人の噂によって、その大要を伺い知っていた。

ところが、今四月の中央公論の創作欄に、『春来る』と題された氏の新作が現れると、間もなく、激しい悪評が、あたり近所から私の耳を襲った。去年の後半期に『元の枝へ』が島崎藤村氏の『嵐』と並んで、近年に例のなかつたほどに、かまびす 囂しく推讃された後、藤村氏は大風の後のように鎮まり返っていた間に、秋声氏は、かの大作の後日譚をポツポツ語っていたのであったが、世の物語の後日譚が多くそうである如く、氏の後日譚も読者や批

評家にあまり喜ばれないようであった。そして、ひそやかな冷笑侮蔑の声は何処からともなく聞えていたが、今度、『春来る』が現れるに及んで、作者に対する嘲罵の声が渦捲いて来たようである。（世間の狭い私が、そう感じただけで、一般の文壇ではどういつているのであるか、今のところまだ私には分らないが）それについて、毀誉褒貶の手頼りなさを私はまず感じた。

それで、この頃暫らく月刊雑誌の創作欄を遠ざけていた私も、徒いたずらに押入れに積み重ねられている寄贈雑誌の中から、中央公論を引き出して、『春来る』を読みか

けたが、長い間馴染みの深かった秋声氏の作とは、まるで様子が違っているのに驚かされた。驚くといっても、作に惹き入れられる種類の驚きではなくって、我慢にも読み切れなかった。それで、一目十行の駆け足で通り抜けて、ホツと息をついた。……誇張していうと、私は満身に冷汗を掻いたのである。読むべからざるものを読み、見るべからざるものを見たような感じがした。私は休息しながら憂愁に捉われた。(冷汗を掻いたといっただのは、誇張した言葉ではなくって、私の感想に適切な象徴語であるかも知れない。)

これでは、芸術と事実との関係からいって、読者が眉を顰^{ひそ}めるのも無理がないと思われた。同じ種類の材料が取り扱われているに關らず、『元の枝へ』には、読者の冷笑を招くような間隙がなかった。それに比べると、今度の作品は著しく弛緩している。目も口も帯も締っていない。

二

読後何日かが経った。その間『春来る』が心の拘^{こたわ}り

となっていて、私をして、芸術家の一生について、あるいは人間の老境について、いろいろに思いを馳せさせた。

島崎藤村氏が、かつて、感想録のうちに、「ある作家が自己の経験した事実を書いたものは、それだけで価値がある。それが芸術になっていったなら更に尊い」という意味のことを書いていた。過去において、『あしあと足跡』や『たゞれ』や『何処まで』のような、人生世相をさながらに写した多くの大作を出した秋声氏の、老後の心境記録が、そう蔑視されるはずはないと、私は思い返して、再び雑誌を取り上げて、『春来る』を開いた。今度は、人生記

録に直面したつもりで、襟を正して、行から行へと熟読した。ペンを持って、何かの意味で自己の心の刺戟されたところに線を引いた。

田山花袋氏の『蒲団』以来、近松秋江氏の幾つかの「いわゆる痴情小説」、島崎藤村氏の『新生』、筆に上されなかつた島村抱月氏の痴情小説の材料、武林無想庵氏の「コキユ―」物などによつて、人生を学んで来た私は、自分で老境に入っている今日、『春来る』によつて、ついに老人の恋を学ばねばならぬような機会に接した。舶来の書物によつてかつてかつて学んだストリンドベリーやゲー

テの晩年の恋愛も、髣髴として思い出される。以上の諸氏は、身を以て当って、満身に創^{そう}痕^いをあびて、艱^{かん}苦^くをも歓喜をも体験したつわものである。私は、広津和郎氏が先頃の時事新報の文芸欄でいっていたように、一介の従軍記者たるに過ぎない。したがって、いくら心眼を凝らして見ても、それらの作品の心髄に徹することは出来ないかも知れない。……しかし、如上の諸作品も特異の奇事奇想を描いたのではなくって、その多くは世間にザラにあることが取り扱れているので、我々も自己の心裡に、これら諸作品に現れているものの萌芽を有しているので

ある。だから、共鳴を感じずることも反感を起すことも、あるいは前車の覆轍ふくてつとして自から戒めることも出来るのだ。

『春来る』は、世上周知の一老文学者と一美少婦との恋愛記録の一篇で、この材料については、作者ははじめは、遠慮しながら書いていたようであったが、次第に歩を進めて、今度のになると、臆面もなく材料をぶちまけているような態度を取っている。しかし、その態度は、二、三の作家の愛慾小説の如く、芸術的勇猛心とか、自暴自棄的苦悶とか、あるいは芸術によって自己救済を試

みようとするような願念に基いたのではなくって、次第に馴れっこになって、臆面もなく何でも書き得るようになったという程度のものである。同じ作者の『元の枝へ』や『暑さに喘ぐ』などとは、根柢からして態度が違っている。

恋愛小説にも種類が多い。そのうちでも、男女の相剋に關したものが、芸術の好題目になるらしく、読者をも感動させ易いようである。『春来る』の如く、男女相愛の甘い遊戯を描いたものは、作者の主観がよほど嚴肅であるか、あるいは作者の筆致に読者を陶醉させるような

妙味を含んでいて、有無をいわせず、作者の恋愛境地に読者を惹き込むようになければ、芸術としての効果を奏し得ないのである。手放しの惚気のろけには辟易するという世俗の人情は、心理的考察を試ると、他の幸福に対する人間固有の嫉妬心に基くらしいが、傑れたる恋愛芸術においては、そういう嫉妬心を圧倒するに足る魅力を有っている。森鷗外訳の『即興詩人』やツルゲネーフの『恋の凱歌』などは、その例として取り出している。元の戯曲『漢宮秋』の如き、哀傷艶美の詞句が綿々たる情緒を生動させて、読者を恍惚たらしめるのだ。

ところが、秋声氏の作風と文章とは、元来こういうものには適当しないのだ。簡潔枯淡な筆で、色っぽい姿態や情緒をほのめかす巧みな手腕は、かねて氏の作品に現れていたものであったが、あくどい色話は氏の筆には不適當である。それにしても、『たぐれ』や『あらくれ』の作者が、『春来る』のような、冴えない混濁した、薄汚いような作品を一篇たりとも出したのは、一応は呑み込みかねる。……しかし、私は熟読後に思いをめぐらして、人生と芸術との微妙なる交渉に感慨を催した。この一篇を読んだあとで、氏の過去の作品を読み返すことは、文

学研究に役立つ点が少なくないと思われた。

三

私は詩人的詠歎に包まれたような島崎藤村氏の小説を昔から愛誦している。詩的空想に捉われない、世上の真相の描写に巧みなる徳田秋声氏の長短篇にも、類例のない文学として推服していた。そして、詩から小説に移った藤村氏は、詩的空想を恣ほしのままにすることを避けて、最も多く自叙伝風の小説を書き続け、忠実に自己の見聞

自己の経験に即して筆を執った。秋声氏は自己を離れて他を描くことにも巧みなのであつたが、自己の日常生活、自己の周囲の見聞録みたいなものを題材として、そこに、人生の一片をさながらに現すことにも妙を得ていた。二氏は、ともに詩的空想を離れて写実に徹しようとし心掛けていたのであるが、二氏の産み出した作品は甚だしく趣を異にしている。藤村氏は、詩を離れようとしながら、その作品には自ら詩趣が漂っている。ことに、『新生』は一篇の詩であるといつていい。いろいろな人間や事象は臙ろげで、作者の唄う哀切な唄が読者の心を誘う。そ

して、氏の自伝小説を続けて読むと、そこらに有り振れた凡庸な人間とは違った、何らかの意味でえらいところのある一人物が、年少にして信州の山奥から都会へ出て、浮世の辛苦艱難な道を辿って老境に達した物語を聴いているような感じがする。作者は物語の主人公たる自己を取り扱うに当って、あくまでも謙遜の態度を執っている。謙遜過ぎるくらいに謙遜している。西洋の文豪の自叙伝に比べるまでもなく、日本の花袋氏や秋声氏の作品に現れているものに比べてさえ、藤村氏は人生に対して一層多くの謙遜の態度を執っているのだが、それに関らず、

氏の自叙伝小説は、辛惨の生を経ている偉人の物語のよ
うな感じを読者の心に伝える。あるいは、少年より晩年
に至るまで、たゆみなく人格の陶冶を試みている一人物
の物語のようにも思われる。ところが、秋声氏の自伝風
の作品を読むと、そこには、浮世の波に漂わされている
ただの普通人の姿のみが、さながらに我々の目に浮んで
来るのである。天の使命を帯びて下界に下ったのでもな
ければ、悪魔の陰謀を携えてこの世に仮りの姿を現して
いるのでもなくって、ただの人間が動いているのである。
それは、浜の真砂の一粒に等しい人間なのである。……

二作家がそれぞれに自己の三十代の生活を描いたと思われる『家』と『懲』^{かび}とを比べて見ても、私はそう思う。

私は六、七年前に、珍しく藤村氏と対座して、長時間の雑談に耽ったことがあったが、その時、氏は秋声氏の『懲』などを称讚したあとで、「しかし、主人公がその夫人に対して情味の発露の欠けている」のが、腑^ふに落ちないらしく、そこに不満らしい評語を挿んだ。たとえば互いに飽き足らぬ思いをし続けた夫婦関係であつたにしろ、長い同棲生活の間には、自から情味の湧く時もあったであろうのにと、藤村氏は疑いを挿んでいたのである

う。なるほど、氏らしい意味のある見方であると私は思った。

従来、秋声氏の小説は、ある種類の読者には、詩のない乾涸ひからびた作品のように思われ、ある読者や批評家には、銜げん気や稚き気を全く脱した、灰汁あくの抜けた、枯れた、錆びた、名匠の所作のように思われていた。あるいは、東洋的悟道の静境地に化身している芸術家のように見ている批評家もあった。……しかし、今度の『春来る』によつて、そういう批評家も、我々も、一人の人、一人の芸術家の心境を軽々しく固定的に判断することの危さを、痛

感じなければならぬ。人間は境遇によって動くものである。他人のことよりも我々自身、いつどう動くか分らないのだ。

とにかく、秋声氏に取っては、春の来るのがあまりに遅かった。

この新作においては、藤村氏の氣遣っていた情味が堰を破って横流している。作者は情味の海に呆然として漂っている。ここににおいては、以前光っていた作者の目は盲い、芸術の帯はしどけなくなっている。が、一方からいうと、以前の作品には欠けていた詩が、よくも悪くもこ

ここに現れたといわれたいわけではない。

私は、この作品が三人称で客観的形式の下に書かれたことも、作の内容と不相応で、失敗の一つの原因になっていると思う。この小説だけを引き離して、作者の名前をも匿^{かく}して、文壇の消息に通じない読者に読ませたなら、理解し難いところがあるであろうが、それは、この作に限らないで、作者の芸術と日常の行為とが交錯して、一を以て他の足らざるを補って読まれるのを例としているのは、日本現代の小説の特異性なので、この作などには、それが少し度が強いだけなのである。

この作は、三人称になっているが、三人称らしい傍觀的態度は全く見られない。この小説において、老いたる小野の目に映る美女愛子は、信仰の対象ともなし得られる一つのマドンナである。容色といい、声といい、才気といい、文字までも、よくってよくって堪らないほどに、完全無欠な女なのである。色恋に溺れたものの目には、相手の女の「頭の天辺から足の爪先きまで」が美しく見えたり、何かから何までが気に入ったりするのは、あたり前なので、そこに惑溺した人間の面目がさながらに現れるのであろうが、しかし、作者の筆がべたべたしている

のは、芸術として最も忌むべきことである。他の作家ならとにかく、秋声氏は、たとえ筆致が無味乾燥に失することは、あるいは有り得ても、金輪際、べたつく弊はあり得ないと、かねて信じていたのであった。べたつくということとは、芝居道でいうところのどんちよう緞帳趣味の芸風であるのだ。『春来る』は、作中の人物がべたついていだけでなくって、作者の筆が締りなくべたべたしているのである。だから、作中のべたついてい人物が、読者の同感を得るように生動して来ないのだ。此処に現れているところだけによると、愛子は妖婦でもなく才女でも

なく、多少の淫蕩性いんとうを有っている一凡婦たるに過ぎないし、主人公小野も、血液の最後の一滴も涸れるほどの恋の苦悶をしたミュツファ伯爵のようでもない。四つ這いになって、唸りながら、ナナのふくら脛はぎをギユツと噛むことの熊遊びをさせられたり、犬になって、ナナの投じたハンカチフを啣くわえて来させられて「いい狗いぬねえ」といわれて興じたりするほどの凄惨味があるのではない。「小野はベットを下りて、彼女を後ろから抱き上げた。そして部屋中を歩いた。それから愛子が小野を負って歩いた」というような、読者の気を悪くさせる程度のものである。

作者は、節制なく相手の女子を讃美して、「例の頭脳の好き」とか、「愛子の頭脳のよさも好きであつたが」などと頻りにいつているが、何処を熟読しても、この女子に、有り振れた女子以上の頭脳のよさがあるとは思われない。そんなところは何処にも描かれていないのだ。芸術に関する会話の条下など、乳臭さと齒の浮くようないやみを感じさせられただけだが、それは、私に女性批判の目がないためなのであろうか。

「暫くでも愛子が傍を離れて行くと、直ぐ心が空洞になつた」とか、「己はすっかり自己がなくなつてしまつ

たようだ。己は何にも出来やしない。愛子が居ればいいで、居なければ居ないで」とかいうような心境を中心として、年齢の相違やその他の関係から、女が自分を離れはしないかという不安な思いを背後に潜めている老人の恋の実相を、在来はこの作者の技巧でスツキリと書いたなら、一つの傑れた芸術品が現れて、文壇を豊かにするのであったが、作者は、筆を運んでいるうち、ややもすると、そういう芸術上の用意はスツカリ忘れて、ホクホクと相好を崩して悦に入っているのである。

しかし、この『春来る』が、芸術品になりそこねたと

ころに、芸術と人生に関するいろいろな意味を捜し出そうとすれば出来ないことはない。

四

私はこの一篇を読んでいるうちに、ふと玄宗と楊貴妃との情事を思い出した。淀君に惑溺した老耄ろうもうの秀吉を思い出した。「天に在つては連理の枝、地に在つては比翼の鳥」と、後代の詩人に唄われた玄宗の、国を亡ぼしても悔いない心境は、歴史の隔りによって美化され、詩人

文人画家などによって色取られてわれわれの心に映っているが、現代の写実的眼光で世話に砕いて、その真相を見たなら、『春来る』と同じことだったかも知れない。

「天に在らばお月様、地にあらば玉霰たまあられを玉の床ゆかと定め」

と、元禄の世之介は、時代相当の俳諧趣味で、白楽天の詩句を翻案しているが、『春来る』の男女にも、「段々憂き世放れのして来た」二人だけの世界の恍惚境が存在しているに違いない。そこは、花袋氏などがしばしばいっているように、金も名誉も世間も芸術も塵芥に等しく思われる恍惚境なのであるが、それを、惑溺者自身が文

字に伝えるのは至難のことなのである。芸術の神はエホバ神の如く嫉妬の神である。甘い惚気を、そのままに捧げ物としても受納しないのである。

過去の秋声氏の小説は、いわゆる客観的態度を基調としたもので、あるいは事相から離れ過ぎていくかも知れないが、『春来る』は、事相に即し過ぎていく。材料に甘えてただべたついているのである。数十年の間、世相の経験を重ね芸術上の鍛練を積んだ作家も、一朝溺愛の境地に墮すると、こんなになるものかと思うと、それは、私に取っては、等閑視しがたい重要な問題なのである。

「ほんとうに好いと思うね。この材料を己も書こうと思うが、書く必要はなくなったようだ。今に己の株を取っちゃうだろう。いや、それ以上に己にないものが愛子にある。」

「ううん嘘よ。先生なんて三十年もの積み重ねがあるんですもの。知ってますよ……でも、これならよく書けたというものね。」

他の点はとにかく、文学の上ではまだ乳離れもしないような少女が、仮りにも、三十年の水火をくぐって鍛練されて来た作家と自己とを比較して、いい気な口を利い

ているところを読んで、私は滑稽に思うよりもむしろ憤慨の感を起した。芸術に対する冒瀆ぼうとくである。

現代の婦人雑誌が、俗悪な読者の趣味に投じるために、ゴシップ種になりそうな婦女子を引き摺り出して、物を書かせることが流行しているが、それが、どれほど文壇を賊ぞくし、婦女子その人の将来をもあやまるかも知れない。この頃、二、三の婦人が、「あんな女でさえ、小説なんか書いて、世間に名を売って、多額な原稿料をも取っているのだから、私たちも、何か書かなければ損だ」という意味のことを、私にいつていた。さしたる修業もしな

いで、虚名と慾のために、文壇へ出ようと、ヤキモキしている婦女子が、この頃は少なくなきようである。婦人雑誌がこの悪弊をつくったといつても、見当違いではあるまい。さき頃『改造』に掲げられていた数氏の婦人雑誌攻撃の文章には、私はほぼ同感である。それに対する弁護説も何処かに出ていたが、こういう婦人雑誌が続出するのは世間の要求に基くので、それが止むを得ないことであるにしても、堂々たる批評家が、婦人雑誌の肩を持つて、現在の悪風潮を助長させる必要はあるまい。

五

私は、『春来る』の作者が、『春来る』の境地を抜けたあとでは、氏の芸術が、過去のそれとはちがった色彩を帯びるであろうと予想した。惑溺の体験は芸術家の重要な心の糧となるのであるが、渦巻のなかにおいて渦巻を描くことの至難さは、この一篇がそれを証明している。

しかし、ここでも、実行と芸術について私は考えた。恋愛にしろ、労働にしろ、戦闘にしろ、あるいは社会革命のような事業にしろ、そういう実行に身を托している

人々には、芸術なんていう影のようなものはどうでもい
いので、古来人類が閑余に考え出して積み重ねて来た芸
術観は、宗教意識とともに一つの迷妄なではあるまい
か。私などは長い間芸術に浸って来たのであるが、そこ
に自己存在の意義を靈感して、そこに全心を托して安ん
じたことは一度もなかった。

ストリンドベリーは、晩年の感想録『青巻』の最後に
おいて、悩みの多かった一生の結論として、「祈りなが
ら働け。苦しみながら望みを抱け。天と地とを共にわが
裏に有つのだ。永久の定住を求むるな。この世は巡礼の

世である。故郷ではなくて、さすらいの場である……」
と、中世紀の口吻を用いて、神秘の境地を天の一方に望んでいゝるが、それは私などが達せられない境地である。

そう結論をつけたストリンドベリーは、同書の他の章下に、ルツソウの言葉を引用している。それは私の心胸に触れるところがあるから、長くとも転載しよう。

「若い時分、私は人生の疲弊に堪えかねて自殺した一英国人の記事を読んだことがある。その青年は、毎日ほめたりはずしたりするボタンの数を数えていたということである。すなわち、下着には半ダース、日中のシャツ

には半ダース、カラーとカフスに半ダース、チヨツキ、上着、外套に一ダース、長靴、ゲートル、手袋に二ダースというように、彼れは馬車に乗って出る時にも、中食晚餐の折にも一々服装を変えてはボタンを数えていた。

こういったら、可笑おかしな話だとは思われようが、しかしこれは人心の真相を暴露した話である。彼れは生活が疲弊したので無益なことをして半日を費していたのである。すなわち不必要な訪問をすること、電話をかけること、用もないのに手紙を書き、新聞を読むこと、特に衣裳といつても、もとは紐で結べば事済んだものであるが、

今ではボタンをつける、フックをつける、眼をつける、紐をつける、リボンをつける、留針をつける、ビジョ金をつけるというように事々しい。我々の衣裳たるや、多くは無益のノンセンスたる煩瑣な時間空費の文明を縮図的に表わしたものである。田舎に居つて土地を耕すものは、美術も科学も、文学も必要が無い。自然を有して美術も宗教も必要のないものは科学者文学者よりも尊い人である。教会は到る処にあれど、博物館、劇場、書店、倶楽部は町ばかりにある。それらが必要であるか否かは別問題である。」（柳英彦氏訳）

前世紀までの累世の旧套を脱した新しい目で人生を見た新人中の新人であったルツソウが指摘した人心の真相、生活の疲弊は、今日に至っては、ますます激しくなっている訳である。ノンセンスな煩瑣な時間空費の方法は、文明の進むとともに、ますます頻繁に案出されるようになったこと、地下からルツソウを連れて来て見せたなら、驚嘆して目をまわすだろうと思われるほどであるが、しかし、彼れのいうところの「自然を有して、田舎に居って土地を耕すものは、美術も科学も、文学も必要が無い、……科学者文学者よりも尊い」ということも、

今日の世となつては、彼れの時代に彼れの道破した時ほどの權威をもつて我々の胸に迫つて来ない。さすがのルツソウもすでに古臭くなつている。生活の疲弊は今日は田園人も都会人と同じことになつてゐるではないか。救いがそこにあるうとは思われぬ。みんなが心靈の安住を得ない「さすらいの旅」をしてゐるようなものである。

ストリンドベリーは、「この世は巡礼の世である。故郷ではなくて、さすらいの場である」といつたあとで、直ぐに言葉を續けて、「真理を求めよ、さらば発見し得る。ただ道にして真理であり、生命であるキリストと共

にあつてのみ真理が悟られるのだ」と、解決をつけて、一卷——あるいは彼れの一生——の締め括りをつけているが、それが、東洋の末世に生れた私などには取って付けたもののように思われる。ルツソウも、その『懺悔録』において、「この一卷を提げて神の審判の前に立つ」といつているように、あらゆる旧套を脱しても古い神から脱却することは出来なかつた。

今日の時世に生れた我々は、おのずから神から脱却されるようになっていく。『懺悔録』の流れを汲んで、赤裸で自己告白をすることも常套月並になつて来たが、こ

れら現代の作家は、前代の新人ルツソウの心に潜在していた神の名残りを、最早留めていないのである。

私が、突如として、ストリンドベリーやルツソウを持ち出して来たのも、『春来る』に何となく関係を有っていると思つたからなのだ。

数十年の間、ただの普通人の世相をさながらに見て来た徳田秋声氏の晩年の心境がここであつたとすると、文学の修養は心霊の陶冶にどれだけの価値があるかと疑われる。少女との手頼りない一時の戯れを外にしては、空虚な淋しさが、救うすべもなく老主人を襲っているらし

く、私には推察された。「暫らくでも彼女を見失うことは、やはり寂しかった。」それは生活力の衰えた老人の普通の心情なので、私なども、自分の前途をそこに見なければならぬのであろうが、それでは、文学の鍛練は心性にさしたる関係はないように思われる。小説だの感想だのの形において、赤裸々に自己告白を何十年しつづけて見たって、それはそれっきりで、自己の真生命に取って何の足しになるのであろうと思われたいではない。西鶴の『置土産』には、蕩児の末路がいくつも描かれているが、そこには、命に安んじている暢達の風趣が漂って

いる。色修業は文学修業よりも、心霊の陶冶については一層力をもっているのではなかろうか。

文学、文学。書齋裡で文学に没頭して、浮世の影を追っている私は、たまたま『春来る』を読んで、いろいろに作者について考え、自己について思いを廻らしたが、周囲は荒涼としていた。（昭和二年四月十四日の夜、若葉にそそぐ雨の音を聞きながら、大磯にて）

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館